

## 『伊勢物語』と日本の美意識

マルティン・ティララ

『伊勢物語』は日本文学史上で主要な位置を占めています。平城天皇の子孫の在原業平はその主人公だと言われています。しかし、実在の登場人物というよりは架空の人物であり、当時の理想的な男性だったと言われています。その男性「むかし男」は理想的な文化世界の代表者でした。その世界は日本の美意識に深い関係を持つ「みやび」の世界です。

「みやび」という美的範疇は近年『伊勢物語』と結び付けられていますが、その例は以前の作品にもみつけれられます。「みやび」という言葉の定義は沢山ありますが、よく出てくるのは「宮廷風」か「都会風」です。『伊勢物語』のいくつかの段で、この美意識のあらゆる層でこの意味を受諾できますが、その具体例を見る前に、「みやび」の起源と他の美的概念との関わりを検討する必要があります。

「みやび」という言葉が初めて出て来るのは、奈良時代に編纂された『万葉集』の中です。『万葉集』にはこの言葉が十回程出てきますが、その使い方と綴りは一貫していません。最も有名な例は以下の和歌に見られます。

「烏梅能波奈 伊米爾加多良久 美也備多流 波奈等阿例母布 左氣爾于可倍許曾」(原文)

「梅の花夢に語らくみやびたる花と我思ふ酒に浮かべこそ」

(『万葉集』巻五・八五二)

ティララ訳：

梅の花は夢で次のように言いました。「あたしが優雅な花だと思ったら、酒に入れて、あたしの美しさをぞんぶんにたのしめ。」

この場合だけ、それぞれの音節を万葉仮名通りに「美也備」と記してあります。他の用例では「風流・風姿・閑雅・藻・温雅・雅妙・遊」などの漢字の訓読みとして見いだされます。確かに、これらは似ている言葉ですが、全く同じ意味ではありません。共通しているのは優雅な事、洗練された行為ではないでしょうか。

どの言葉も奈良時代の「みやび」の美的概念のアスペクトだと考えてもいいと思います。「みやび」の語源を考えると、「み」という敬意を表す接頭語と「屋」

か「家」を意味する「や」から成っています。構成された単語「みや」は「宮・宮廷・天皇・天皇家」などの意味があります。「みや」に付いている接尾語「び」は「風・式・ように」だと解釈されています。ですから、現代日本語の「宮廷風」という解釈は語源に基づいているようです。「みやび」の深層、いちばん古いレイヤーは天皇家、王朝の人々の行為に関係があるようです。しかしながら、前述した歌を見ると、「美しい・優雅な」ほうがもっと自然な解釈だと思えます。似通った意味、雰囲気以下の「みやび」という言葉を使っていない短歌で見ることができます。

「春日野之 浅茅之上尔 念共 遊今日 忘目八方」(原文)  
「春日野の浅茅が上に思ふどち遊ぶ今日の日忘らえめやも」

(『万葉集』十巻・一八八〇)

ティララ訳：

今日は浅茅が沢山生える春日野で良い友達とあそんだ。この日を忘れられないと思う。

「春野尔 意将迹跡 念共 来之今日者 不晚毛荒梗」(原文)

「春の野に心延べむと思ふどち来し今日の日は暮れずもあらぬか」

(『万葉集』十巻・一八八二)

ティララ訳：

良い友達と春の野を楽しむために来た。今日は日が暮れなかったらいいな。

この二つの歌を詠んだ人は友達と一緒に美しい自然を楽しんで(遊んで)います。このような短歌では歌人はいつも友達と遊んだり、会話したりしています。美しい自然を楽しむため、会話あるいは和歌が不可欠な役割を果たしていました。一八八二番の歌にも八五二番の歌にも「遊び」という言葉が出ています。「あそび」というのは①音楽を奏すること、②歌を詠むこと、③お酒を飲むこと、④狩をすることなどの意味があります。八五二番の歌に梅の花はお酒の杯に入れてもらいたいと言っていますが、その歌は「あそび」の時、宴会、現代語で言えば「おしゃれなパーティー」の時に詠まれたようです。一八八〇番の歌と

一八八二番の歌には「みやび」という言葉が含まれていませんが、美意識の概念としての「みやび」をよく示しています。優雅なものを楽しむ「遊び」は「みやび」の古いアスペクトの一つだともいいでしょう。

もう一つのアスペクトは『万葉集』の歌で見られます。それは恋愛若しくは求愛に関係があります。

「遊士跡 吾者聞流乎 屋戸不借 吾乎還利 於曾能風流士」(原文)

「風流士と我れは聞けるをやど貸さず我れを帰せり おその風流士」

(『万葉集』二巻・一二六)

ティララ訳：

みやびの男だと聞いたが、あたしを宿に入れなくて、そのまま帰した。いんちきのみやび男め！

「遊士尔 吾者有家里 屋戸不借 令還吾曾 風流士者有」(原文)

「風流士に我れはありけりやど貸さず帰しし我れぞ 風流士にはある」

(『万葉集』二巻・一二七)

ティララ訳：

僕がみやび男だということを見せただろう。君を宿に入れなくて帰したからこそ、みやび男にちがいない。

最初の歌は、大伴田主という優雅な貴人を誘惑してみた石川女郎という女の人が詠みました。石川女郎が乞食の格好して、田主の家に薪を頼みに来た振りをしています。しかし、成功しないで、そのまま帰されました。石川女郎は、田主がその乞食は彼女だと分からなかったと思ったので、一二六番の歌を贈りました。噂の色男ではないと怒って詠んでいます。二つ目の歌はそれに答える田主の返答です。自分が本当にみやび男だと主張しています。彼女に誘惑されなかったから、優雅な貴人だと言っています。女の人が一人で男の人の家に性的な行為をしに行くのは、当時普通ではありませんでした。石川女郎はマナーを犯すことをしてしまいました。

「みやび」の文化は新しく造られた都、平城京で徐々に形作られました。平城京で行われる恋愛には順序やマナーがあり、その品の良い恋愛ができる当時の男性は「風流士（みやびお）」と呼ばれていました。『万葉集』の「風流士」は「みやび」の文化の代表者ですが、この場合は「みやび」は品の良い洗練された恋愛行為

を意味しています。

この「みやび」のアスペクトの背景に中国文化の「風流」という美的範疇を見分けられます。「風流」、中国語で「feng-liu」は歴史の流れで様々な変化を遂げましたが、その意味を時代によって三つに分けることができます。儒教的な「貞操」と道教的な「優雅な遊び」と「好色」です。一つ目の「貞操」は「風流」と表記して、「みさお」と読む用例は『日本霊異記』に出ています。

「大倭国宇多郡漆部の里に、風流なる女有りき。」  
(『日本霊異記』第十三)

ティララ訳：

「大和の国宇多の郡ぬりべの里に、心の高潔な女がいた」

残りの二つ、「優雅な遊び」と「色好み」、「風流」と表記して、「みやび」と読む用例を『万葉集』で見ることができます。『万葉集』では「風流」と「みやび」は同じ事を指していたと思えます。ですから、奈良時代の「みやび」は既に多重層の美意識だったに違いありません。

平安時代の『伊勢物語』に「みやび」の用例は一つしかありませんが、物語全体が「みやび」の概念とも取れます。

「むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけい。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫摺りの狩衣をなむ着たりける。

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず

となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ。

みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。」

(『伊勢物語』初段)

初段で主人公「むかし男」は旧京（奈良）に狩に（遊びに）行って、そのさびれた町に似合わない、とても美しい姉妹を垣間見てしまいます。「みやび」の代表者、「風流士」として、彼女たちの美しさを褒めるためと、自分の恋の深さを表現するために、和歌を詠み、その歌を自分のファッションナブルな狩衣の裾から千切った布の切れ端に書いて送ります。美との出会いに情熱的で気の聞いた歌とスマートな行動で応じています。初段の最後の文章は注目すべき文章です。

「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。」

「昔男」は「いちはやきみうあび」を見せる人だったというコメントですが、「いちはやきみやび」は大胆で、その場で現される「みやび」だと思われまます。この「大胆なみやび」は『万葉集』の「宮廷風」と「優雅な」みやびとは違う新しい美的概念だと言ってもいいでしょう。「色好み」とも言えません。『伊勢物語』の作者たちは当時の人に新しい美意識を紹介していたようです。主人公はただの情熱ではなく、洗練された和歌を送っています。「色好み」と違い、「いちはやきみやび」の場合は、行動で伝統ある高い文化を伝えようとしています。しかし、その伝え方は独特であり、過剰でもあります。奈良時代の「みやび」のそれぞれのアスペクトも独特でしたが、大胆で、激しくはありませんでした。

『伊勢物語』には初段と同じような場面が沢山あり、頻繁に即興で何かをした話が出てきます。即興と独創力は『伊勢物語』の「みやび」の不可欠な要素でした。しかし『伊勢物語』の著者たちの新しい美意識には奈良時代の「みやび」のアスペクトがすべて含まれています。元々の語義もその他の「みやび」の意味も主人公在原業平に当てはまりません。業平は二人の天皇の子孫で、「みや＝天皇家」の昔の文化の代表者でした。しかし、この元々の「みやび」の意味は『伊勢物語』ではメインの意味で使われていませんでした。主

人公は当時の天皇制を支えていませんし、藤原家に奪われつつある平安初期の天皇家に、ある意味で抵抗していました。藤原基経の妹で、清和天皇の女御になる高子と、天照大御神に奉仕する伊勢の斎宮になっていた活子内親王との情事はその例です。

主人公は幾つかの段で罰として、あるいは、反省をするために、東国へ行きます。この有名な「東下り」の話は重要な役割を果たしています。「みやび」と「鄙び」の対比を、「都会風」の文化に馴染んだ主人公が田舎へ行くことにより表現しています。「鄙び」の背景で「みやび」の洗練された文化がより際立ちます。要するに、読者には「みやび」の素晴らしさが一層分かりやすくなるのです。初段の話しを奈良で設定したのも、読者（聞き手）にショックを与えるためだったと考えられます。

そして、もう一つの「みやび」のアスペクトを考えなければなりません。「みやび」と「風流」の一つのレイヤーは「色好み」だと先ほど述べました。『伊勢物語』の主題は間違いなく愛のことですから、「色好み」の話は何度も出てくるわけです。「色好み」は「恋愛や情交を好み、その情趣を歌などの遊芸に表現する行為や人のことです」（高橋亨）。しかし、「色好み」の主体は元々権力者で、天皇あるいは皇子でした。記紀の主人公は頻繁に「色好み」の人とされ、奈良時代の「色好み」にはまだ肯定的な意味がありました。しかし、平安時代になると、主人公の場合には、この言葉を使わなくなりました。平安物語の主人公、「昔男」か「光る源氏」は「色好み」の人ではなく、「みやび」の文化の代表者になっています。「色好み」という言葉は既に否定的な意味を持ち始めましたが、その肯定的な意味は「みやび」に残っています。

『伊勢物語』と日本の美意識は密接な関係があり、その代表的概念は「みやび」だったと言えます。「みやび」は重層的な概念でしたから、『伊勢物語』の「みやび」を一つの定義で説明することはできません。